

2020年度 JACET 中部支部 講演会

2020年10月17日(土)15時-16時

Zoom 開催

参加費:無料

講演2

「国際共通語」の解釈を考える—英語教育は何を目指すのか

講師紹介

柴田 美紀(しばた みき)

アリゾナ大学大学院博士課程修了、第二言語習得・語学教育博士。広島大学人間社会科学研究科教授。研究分野は第二言語習得、特に昨今はEMI(English-medium instruction)環境における学生のアイデンティティと言語使用の関係に焦点をあてている。著書に、『沖縄の英語教育と米軍基地—フェンスのうちと外での外国語学習』(2013年、丸善出版)、『英語教育の素朴な疑問—教えるときの「思い込み」から考える』(2014年、共著、くろしお出版)の他、近著『英語教育のための国際英語論—英語の多様性と国際共通語の視点から』(2020年、大修館書店)がある。また研究論文に Tokumoto, M., & Shibata, M. (2011). Asian students' attitudes to their accented English, *World Englishes* 30 (3), 392-408, Shibata, M. (2019). Native speaker English vs. English as a lingua franca: Whose English is 'real' in and outside the classroom? *Asian English Studies*, 20, 74-94 などがある。

要旨

昨今、英語は「国際共通語」と位置づけられ、日本の英語教育でもこの認識を考慮した指導が求められている。このことば自体の理解はそれほど難しいものではなく、ほとんどの人は分かったつもりになる。しかし、そこには様々な意味合い(あるいは策略)が含まれており、複数の解釈が可能である。したがって、英語教育で何をどのように指導するかを考える際、英語教育に携わる各々が「国際共通語」を多角的に捉え、自分なりの解釈をするべきであろう。例えば、国際共通語を「英語がもはやネイティブだけの所有物ではない」と捉えることもできる。そして、この解釈は必ず「実際の指導ではどの/誰の英語をモデルにしたらいいのか」という質問につながる。今回は、human ecology language pedagogy (Levine, 2020)の考えも視野に入れながら、国際英語論の視点から「英語教育」が目指すべき方向性について考える。